

令和元年度「不登校に関する研修会」(第3回) 講義記録

- 1 日 時 令和元年8月30日(金) 10:15~12:00
- 2 会 場 県立丹波の森公苑
- 3 講 師 大阪成蹊大学 米田 薫 教授
- 4 テ ー マ 不登校は個と集団の両面からアプローチしよう
～ふれあいのある学級づくり・魅力ある学校づくりが個の支援に生きる～
- 5 内 容
- (1) 不登校の現状について
 - ・ 不登校の経験がある児童生徒は、年度当初に丁寧な支援が重要である。学級びらきからの2~3日で、行くか行かないかを判断する子もいる。
 - ・ 前年度までに不登校の経験がない児童生徒は、9月以降、クラスが不安定になりやすい時期に現れやすい。
 - ・ 不登校の半数が、翌年に登校するといわれるが、実際は学年が進むと復帰する率は低下している。
 - ・ 勉強が分からないから不登校になるということは少ない。しかし、復帰するときに勉強が分からないことがハードルになる。学力保障が必要である。
 - ・ 欠席が続いたとき、担任が家庭訪問で部屋に入ってきて引っ張りだされたことが引き金で長期的な不登校になったという子どもがいた。その後、担任は謝ったが、不登校状態は続いた。人間関係がないのに侵襲的な関わりをすることは、よい支援にはならない。
 - ・ 教室の状態も復帰するときにハードルになる。教室が落ち着かない中で復帰しても、不登校に戻ってしまう。元のクラスのクラスづくりが大切である。
 - ・ いじめには、加害者、被害者、傍観者、仲裁者がいる。傍観者が、いじめを止められなくても「私たちにクラスでそういうことをやめてほしい」という目で見ているかどうかで、集団の状態は変わる。傍観者の状態で集団の状態は変わる。
 - (2) 不登校児童生徒への支援について
 - ・ 明確な方針と幅広い方策を持つ
 - ・ 未然防止となる魅力ある学校づくり、初期対応としての早期発見・対応、長期化した不登校生に必要な専門機関との連携、学校復帰に向けた粘り強い支援が柱となる。
 - ・ 不登校には長期的支援が必要である。つらさに寄り添う姿勢が大事である。その子が本を読んでいたなら、その本を読むなども支援に役立つことがある。太陽にあたり、生活リズムを整えることも大切である。
 - (3) 居場所づくりについて
 - ・ 魅力ある学校は、愛の欲求、力の欲求、自由の欲求、楽しみの欲求を満たしている。面白くてためになる授業が必要である。ただし、面白いただけではいけない。ためにならなくてはいけない。
 - (4) 構成的グループエンカウンター (SGE) について
 - ・ 学校でもあたりまえに実践してほしいが、研鑽を怠らないで欲しい。
 - ・ 気持ちを語りあうシェアリングが大事である。
- ① 質問じゃんけん (体験)
- ・ 目的は自他理解である。勝った人が質問し、負けた人が答える。負けた人が答えたら勝った人もその質問の答えを言うことでお互いのことが分かっていく。基本は頑張っって聞かれたことに答えるが、どうしても嫌なときはパスして良い。

- ・ ここでは、気持ちをまず言い、その後、その理由を言うようにする。
- ・ 「具体的に言ったらどういうこと？」と、シェアリングで気持ちを語り合う。
- ・ 気持ちを語り合うのは難しい。分からないようなら、「快」か「不快」かを聞く。
- ・ 人間の感情は3層構造のようになっていて、一番基礎が「快」「不快」、その上に「喜怒哀楽」などの6感情があり、その上にその他の社会的感情があると考ええると整理しやすい。
- ・ 「夏休み質問カード」を用いると、人の目を見て話をするのが苦手な子どもも答えやすい。

②相互インタビュー（体験）

1 問目 夏休みに「楽しかった」「できた」と感じたのは、どんなことですか。

- ・ 生活の色々な面を聞く。

2 問目 2学期以降で、「できたらいいな」と思うことは、どんなことですか。

- ・ 会話は、抽象的なことから、具体的、さらに具体的、最後に抽象的なものに返すというやり方がよい。

③ シェアリング（体験）

聞いてどんな気持ちでしたか、話してどんな気持ちでしたかをシェアリングしよう。

④ 2人組から4人組へ（体験）

- ・ ペアを2組合併して4人組になりましょう。
- ・ 23秒で「他己紹介」しましょう。
- ・ シェアリングは1回のみ時間延長できる。
- ・ 机は間に入れない。机は気持ちを冷めさせる。イスを円にする。
- ・ シェアリングの間は拍手しない。
- ・ 気持ちとその理由を言う。
- ・ 不登校児の対応にも応用できる。楽しい話（例えば「夏休みどう？」）をした後、本題（「2学期どうする」）に入る。

(5)まとめ

- ・ 個へのサポートと共に、魅力ある学校づくり・クラス集団づくりが大切。
- ・ 多様なアセスメントを基に、子どもの状況を踏まえた段階的な支援をしよう。